

研究ノート

対馬鰐浦アクセント体系のピッチ可変性について¹

Tonal mobility as allophony in Waniura Dialect of Tsushima Japanese

児玉望

KODAMA Nozomi

はじめに

筆者は、日本音声学会第 327 回研究例会シンポジウム「語声調の音声的実現における異音の変異としての声調変位」において、「位置アクセント」類型に対する「語声調」類型の具体的な音形による定義として、声調変位の位置が可変的であることを積極的に評価すべきではないかという提案を行った。これは、南九州の二型アクセント体系の談話資料の分析で、しばしば声調曲線の変位点が音節境界を挟んで揺れているという分析に基づいている。シンポジウムでは、文節次末音節対文節末音節の高平調という、位置アクセント的なピッチの位置の固定のある鹿児島方言においてさえ、語末に超重音節をもつ場合に A 型のピッチ曲線が変動する例を挙げ、この体系において弁別上重要なのは位置ではなく境界付近のピッチコントウアであることを示した。また、シンポジウムにおいては、後藤祐司（ソウル大学校博士課程）が熊本方言においても境界付近のピッチ曲線が変動するものの、この体系が、下降によって韻律単位の境界を表示する機能を維持する「一型語声調」であるとする分析を行なった。

シンポジウムにおいて筆者は、これらの語声調体系としての二型アクセントの通時的解釈として、日本祖語アクセントの「式体系」のみを保持して位置アクセントを失ったものと解釈するのではなく、本州・四国諸方言が獲得した位置アクセントを獲得しなかった方言である可能性も考慮すべきであると主張した。この主張の根拠は、まず、位置アクセントをすべて失う、という変化が（漸進的な過程として）可能なのか、という疑いに端を発するものである。さらに、現在の本州・四国諸方言に見られる「下げ核」の位置対立は、平安時代の京都アクセントに記録されている低起式諸形の高起化の過程と密接に関わって発達したものであることはよく知られており、この過程に先行する段階で分化した諸方言が「失った」位置アクセントとは、いったいどんなアクセントだったのかが必ずしも明ら

¹ 本研究は科研費（課題番号 2152041100）の助成を受けたものである。

かではない、と考えたからである。この点については稿を改めて論じる。

二型アクセントが位置アクセントの対立をもたないことがこの類型の諸方言のイノヴェーションによるものでないとするれば、同じく位置アクセントを獲得してはいないが、二型（及び一型）アクセントにもならなかった体系もありうると予想される。そのような体系の候補として筆者が目にしたのは、日本放送協会編『全国方言資料』に収録されている、長崎県上県郡上対馬町（現対馬市）鰐浦の談話音声資料である。この音声資料では、以下のような3種類のピッチ実現の揺れが観察される。

(1) 下降契機の実現・非実現（“[”：上昇、“]”：下降、“]]”：先行音節の下降調）

オナゴワ p150～オ[ナ]ゴワ p154「女は」～オ[ナゴ p160「女　ウ]ス]モ]p154～ウ[スモ p155「牛も」　コ[ト]ボス]]p156「カンテラ」～コ[トボシー]ナリヤ p156「カンテラになれば」　イ]マ p159～イ[マ「今」p154～イ[マンゴト p154「今のよう」に」

(2) 語末 H 音節の助詞への移動あるいは非実現

オト[コ]ム「男も」p155～オトコ[カ]リヤ p154「男から」　サト[コー]]タリ p162「砂糖買ったり」～サ[トー]ヤコーツ p165「砂糖や買って」　イエ[マ]ジェ p158「家まで」～イーエ[オ]ルナ p170「家にいるか？」　ワニユラーツ[チュツ]ト]カー p154「鰐浦というところは」～ワニユ[ラ]デ]アッタ p157「鰐浦だった」タマゴン[イー]ジョン p171「卵の入用が」～タマ[ゴオ]]バ p171「卵を」　チョーチン[ノ]p168～チョー[チン]ノ p168「提灯を」フ[ロー]]ワ p173「風呂は」～フロ[ド]モ p173「風呂でも」　ナン]トム[カン]トム p157～ナン[ト]モ]]カン[ト]モ p159「何ともかんとも」

(3) 下降位置の変動

ム[カ]シャー p154～[ム]カシャー p160「昔は」ム[カ]シ]ノ p155～[ム]カシ]ノ p164「昔の」モ[ト]リヤ p164「藻取りは」～[モ]トルガ p164「藻取りが」　アメ[フ]ル p161～[ア]メンフリ p165「雨降り」

このような揺れは、多型アクセント体系においても、語彙的にはありうるものを含むが、出現頻度からみて、自由変異あるいは音韻論的に条件づけられた交替である可能性も否定できない。また、この種の揺れが語頭部と語末部で見られるという点でも、南九州の語声調方言に見られる揺れとの共通性を指摘できる。

この種の揺れが実態として現在も観察できるかどうかを確かめるために、2013年3月と9月の2回にわたって、対馬市教育委員会の紹介で、対馬市鰐浦住民集会所において現地調査を行なった。2013年3月に実施した調査では、『全国方言資料』の談話録音を3名の

コンサルタント²に聞いていただいた上で、語彙リスト、文節リスト、連文節リストの読み上げ調査を行なった。2013 年 9 月に実施した第 2 回調査では、対馬市厳原町在住の江崎マズ子氏による、朗読 CD 付きの方言文学作品『あんねえし』巻末に収録された方言語彙リストを話題として、7 名のコンサルタント³に、鰐浦の方言について自由に談話していただくという形で、談話音声録音をさせていただいた。また、この調査でも、ミニマルペアを中心とした文節・連文節リストと、複合語の読み上げ調査を試みた。

談話音声資料の分析はまだ途上であり、この方言のアクセント体系をどのように分析するかは結論が出ているとはいえないが、シンボジウムで問題としていたピッチの揺れは、リスト読み上げ調査の段階で確認できたので、この点を中心に報告する。

1. 先行研究の概略

対馬諸方言の 1・2 音節名詞については、平山輝男(1999 初出 1951)と金田一春彦(1999 初出 1956)の現地調査に基づく報告がある。両者はほぼ共通の結論となっており、また、周囲の壱岐・筑前式諸方言との型の対応に基づき、対馬諸方言を「外輪東京式」アクセントの変種とする通説も、この段階ですでに確立したとみられるので、これらの点について、簡単にまとめる。

対馬諸方言のアクセントは、下対馬南西部を除き、下対馬の大半と上対馬全域が「対馬主流」というべきアクセント体系にまとめられる。この方言は、全体として型の区別の喪失が進行しており、名詞では 1 音節名詞と、2 音節名詞のうち語末の子音が狭いものでは型の区別がない。また、平山は、動詞・形容詞も型の区別がなく「一型」としている。

2 音節名詞のうち、語末母音が広いものについては、頭高と尾高の区別がある。頭高は、2 音節名詞の 1/2/4/5 に対応し、尾高はほぼ 3 類に対応する。筑前式や壱岐中南部では、1/2 類が 3 類と合流して尾高になっている。1/2 類は、豊前・豊後の外輪式方言では平板型に対応しているので、対馬主流方言では平板型が頭高型に合流し、筑前式等では尾高型に合流した、ということになる。どちらの方言でも「平板型」がないが、博多方言など筑前式の方言では、「尾高」型が環境により平板に実現することから、この型を「無核」とする分

² Y.K.氏(1940 年生まれ)、K.M.氏(1935 年生まれ)、T.M.氏(1936 年生まれ)のお三方にお願いした。いずれも鰐浦生まれの女性。

³ 1 回目の Y.O.氏、K.M.氏、T.M.氏のほか M.T.氏(1936 年生まれ)、S.O.氏(1940 年生まれ)、T.M.氏(1938 年生まれ)、T.H.氏(1936 年生まれ)に加わっていた。

析もある⁴。鰯浦方言で観察される(1)の揺れが、1/2/4/5 類に共通するとすれば、「平板型」と「頭高型」の弁別の喪失により「頭高」の下降アクセントが消去されて「平板な実現」と交替する現象として、博多方言の「尾高無核」と同様な、「頭高無核」を仮定する可能性もあることになる。

これに対して、問題となるのは対馬主流方言の「尾高」型である2音節3類名詞である。この類が「尾高」型で出るのは、外輪東京式諸方言すべてに一致する特徴である。しかし、この型の「尾高」アクセントがすべて(2)のような揺れを見せるとしたら、果たしてこのHは「位置アクセント」といえるであろうか。今述べたように、博多方言においてはこの「尾高」を「無核」とする分析もあるのである。

さらに興味深いのは、(2)の音形である。この「尾高」アクセントは、単に下げ核として後続の助詞を低く実現しないだけでなく、全体として低平な実現形をもっている。平安時代の京都方言で実証される2音節3類名詞も低平である。このような2音節以上の語頭の低の連続は、室町時代までに最後の1音節を残して高となり、最後の高音節(2音節名詞では頭音節)が下げ核となる。東京式アクセントは京阪アクセントの下げ核のこの位置が後ろに1音節ずれたもの、とするのが、本州のアクセント変化の通説である。もしも対馬方言が、この変化を経ず、この類が常に低平のままであったとすれば、位置アクセントとしての下げ核の発達を促した重要な変化を経ていないことになる。

『全国方言資料』の録音で頻出している低平調の連続は、長い動詞形・形容詞形である。平山(1999)は、動詞・形容詞の音形を次末音節が高い一型とするが、これは容易に談話資料で確認できる。この場合の「音節」は、ハイラ[レン]、ユワ[レン]やオモシ[ロー]、オカ[シュ]のようにモーラと解釈すべき場合や、[コー]タリ、キー[トツ]タラ、オ[ツ]レバのように、どこまでを動詞形と判断して2音節と数えるかが問題になりそうな場合もある。但し、活用形によってほぼどこが高いかは決まっているようである。一方で、イ[オーバナ「言いましょう」ウ[ケヨーバナ「受けましょう」やサ[カモルシタルナン]タル「酒盛りしたりなど」のように、動詞での下降がない場合は低平部分もなくなるという関係になる。平安時代京都の動詞の高起と低起の対立は、連低式の高起化によって式対立を失ったことが知られるが、対馬方言の平安時代低起動詞に似た動詞音形が、残存であるのか(型統合後の)二次的な発達であるのかは、2音節3類名詞の低平な実現形と並んで、解明が必要な点であると考えられる。

⁴ 早田輝洋(1982)

以上、2音節名詞に関しては頭高と尾高の2型が知られていること、(1)と(2)を考慮すると、その双方が「無核」、つまり位置アクセントとしての弁別ではない可能性があることを述べた。いわゆる「二型アクセント」とは、型の統合が異なり、「高起式」(1/2 類)と「低起式」(3/4/5 類)の「式のみを残した体系」とみなすことはできない。「二型アクセント」のように、3音節以上の名詞でも型が2種類に留まるのか、あるいは多型的な型の増加があるのかは、先行研究では明らかにされていない点である。もしも3音節以上でも（無核の）2型しかないとすれば、「位置アクセントを獲得しなかったが、二型アクセントにもならなかった体系」ということになるだろう。

2. 鰐浦方言名詞のアクセント型

以下では、現地調査でのコンサルタントの回答を中心に揺れを分析していく。

2.1. 閉音節化による揺れ

先行研究で述べたように、対馬方言では1音節名詞と共に、語末母音が狭い2音節名詞も型の弁別を失っている。このような1音節名詞と共通の振舞は、2音節名詞が語末の母音を失って、実質的に閉音節化している可能性をうかがわせるが、『全国方言資料』の鰐浦方言の談話資料では、実際に狭母音が脱落した発話も多く聞かれる。琉球方言を除く『全国方言資料』は方針として仮名書きによる転写を施しているため、イ段・ウ段の清音は、母音が無声化しているかどうかを書き分けないが、子音が有声の場合にはウ段の仮名で表記されているものが多い。一部の機能語では広母音も脱落する。

(4) [[ジョール]モ「草履も」 ムグツク[リャー「麦作りは」 ソル[カル]]「それから」

このような母音の脱落による音節構造の変化はアクセントの実現にも影響するとみられ、たとえば(3)の[モ]トルガのような頭高の実現は、典型的には2音節名詞に見られるピッチ形である。本稿では、このような母音の脱落（及び無声化）が第2音節以下で見られる場合を「閉音節化」と呼ぶことにする。3音節以上の名詞ではこの閉音節化が起きているかどうか結び付けられるような実現の揺れが観察される場合がある。

2.2. 名詞単独のアクセント形

類別名詞を中心に、音節構造の単純な名詞を中心に調査した。リストの読み上げで、コンサルタント間での食い違いがもっとも小さいのは、2音節以下の名詞である。

2.2.1 1拍名詞

目、手、木、絵、根、火、葉、歯、柄、毛

1型化しており、すべて非下降で現れる。

2.2.2 2 拍 2 音節名詞

牛、鮎、枝、顔、風、壁、川、昼、冬、町、村、雪、空、種、粒*、苗、中、秋、汗、雨、夜、耳、足、指*、紙、年*、月*、波、網、土、炭、舌*、腹、皮、花、島、家、山、草、米*、塩、物*、腕、色、骨、きれ*、ひれ*、弓*、ごみ*、栗、坂、蟻*、馬、鬼、芋、豆、飯*、ふろ

平山(1999)のデータにない語を*で示す。

頭高型では 2 音節目が下降調、尾高型は 2 音節目が非下降となる。聞き分けやすいものがほとんどであるが、一部の頭高語の中に、ピークが 2 音節目寄りで低・高とも聞けるものがあつた。2 音節目が狭いものは、閉音節化しない発音がほとんどであるが、すべて頭高となる。3 人のコンサルタント全員が尾高で発音したのは以下の語である。

(5) 舌 腹 家 草 米 塩 物 腕 色 骨 きれ ひれ 馬 芋 豆 風呂

平山のデータでは尾高となる次の 4 語は、それぞれ 1 人のコンサルタントが頭高で発音した。また、9 月の 2 回目の調査で、川/皮、鼻/花 のミニマルペアによる連文節の読み上げ調査をそれぞれ異なる 3 人にお願いしたが、いずれも区別が出なかった。

(6) 皮 花 島 坂

2.2.3 3 拍名詞

頭、男、砂糖、言葉、袋、嵐、表、光、宝、鉄、林、畑、心、油、柱、姿、胡瓜、五つ、七つ、卵、豆腐、五十、二千、ハンコ、着物、車、印、小豆、蜥蜴、小麦、力、狸、鼠、烏、狐、苺、後ろ、蚕、鯨、葉

リストの読み上げでは、3 音節名詞でも、末音節が下降調となるか非下降かが、型の判別にある程度有効であるとみられる。3 名のコンサルタントが一致して非下降で発音した語を(7)、一致して末音節を下降調で発音したものを(8)に挙げる。

(7) 頭、男、袋、表、卵、豆腐、ハンコ、着物、蜥蜴、狐

(8) 嵐、光、林、油、柱、胡瓜、五つ、七つ、五十、二千、車、印、小豆、小麦、狸、鼠、烏、苺、蚕

一致率は 72.5%である。(7)は、末音節に狭い母音をもつものを含まない点で 2 音節の尾高型と似ている。また、この中で、外輪式方言で尾高型に対応し、平安時代京都方言で全低であつた 3 音節 4 類の名詞 7 語のうち、語末母音が狭い「嵐」「林」「光」を除く 4 語「頭」「男」「袋」「表」が(7)に含まれる。(7)を尾高型、(8)を非尾高型とする。

非尾高型を頭高型と中高型とに分けることができるかどうかは微妙である。3 名のコンサルタントが一致して頭高に発音している 7 語(9)は、2 音節語である「蚕」「胡瓜」以外も、

いずれも 2 音節目の母音が狭く、閉音節化している疑いのある語である。

(9) 車、印、柱、小豆、小麦、蚕、胡瓜

また、頭高型と中高型の間で揺れのあるのは、頭高型で語末の狭母音が無声化する「嵐」「林」「烏」と、2 音節目の母音が狭い「油」「狸」「鼠」「後ろ」「鯨」であり、2、3 音節目が共に広母音である名詞を含まない。一方、コンサルタントが一致して中高型となるのは、語頭音節の狭母音が無声化しているもの 1、形態素境界があるもの 4、後ろが長い 2 音節語 2 である。

(10) 光、五つ、七つ、五十、二千、苺

中高型と尾高型の間でコンサルタントが分かれたのは、「砂糖」「言葉」「宝」「鉄」「畑」「心」「姿」「力」「後ろ」「鯨」「薬」の 11 語であるが、このうち、「砂糖」「後ろ」「鯨」を除く 8 語は、同一のコンサルタントの発話例である。このコンサルタントは、(7)の各語も含め、リスト読み上げでは 3 音節尾高型の 2 音節目と 3 音節目が共に高いという特徴をもつ。一方、中高型の発音では、コンサルタントを問わず、頭音節もかなり高く、頭 2 音節が高いという印象の発話が多い。但し、苺以外の(10)の各語と「砂糖」は、むしろ第 1 音節のみが低く、下降の幅が小さい。

2.2.4.4 拍名詞

2 音節語 4 と 4 音節語 13 の計 17 個のデータを集めた。音節構造の複雑さに比して語数が 2・3 拍名詞と比べて少なく、参考データである。2 音節語 4 語は、「提灯」「饅頭」「焼酎」「包丁」の 4 語で、いずれも非下降と語末音節下降調の間でコンサルタントにより分かれる。4 音節語は、頭高となった発話がない。それ以外の 3 種のうち、コンサルタント 3 人が一致したのは次の 6 語である。

(11) ココ[ノ]ツ「九つ」 ム[ラ]サキ「紫」ア[オ]ゾラ「青空」コ[ガ]ラシ「木枯らし」サ
カ[ミ]チ「坂道」カナシ[ミ]「悲しみ」

一方、3 人の間でまったく一致がなかったのは次の 2 語である。

(12) イドミ[ズ～イ[ド]ミズ～イド[ミ]ズ「井戸水」シオミ[ズ～シ[オ]ミズ～シオ[ミ]ズ「塩水」

2.2.5. 数詞

助数詞を伴う数詞は、コンサルタント間での不一致が非常に小さい。また、助数詞のアクセントが全体を決定しているとみられる場合も多い。まず、和数詞の場合は、名詞の例とも重複するが、「つ」の無声化を避けるため、「～ある」の語形で調査した。3 人一致して次の音形となる。

- (13) ヒ[ト]ツ フ[タ]ツ ミツ]ツ ヨツ]ツ イ[ツ]ツ ムツ]ツ ナ[ナ]ツ ヤツ]ツ コ
コ[ノ]ツ トー]]

助数詞「枚」を伴う漢数詞も同じく規則的であるが、ロクの閉音節化に伴うとみられる実現形ロ]クマイが1例出る。閉音節の数詞は末尾にピッチ下降を伴うが、聴覚的な印象は東京方言などと比べて平板である。

- (14) イ[チ]マイ ニ]マイ サン]マイ ヨン]マイ ゴ]マイ ロ[ク]マイ ナ[ナ]マイ〜シ
[チ]マイ ハ[チ]マイ キュー]マイ ジュー]マイ

漢数詞「〜十」は、非下降と下降の二つの型が出る。また、「十」は下降・非下降で話し手による違いが出た。非下降の「五十」は(10)での名詞の読み上げのときと異なり、コンサルタント全員が非下降の音形で読み上げている。

- (15) ジュー]]〜ジュー ニ]ジュー サン]ジュー ヨン]ジュー ゴ[ジュー ロク[ジュー
シチ[ジュー〜ナ[ナ]ジュー ハチ[ジュー キュー]ジュー

漢数詞「〜百」も非下降と下降の二つの型が出る。ただし、非下降の場合には語末母音のクが有声であればこの音節が低い下降調となり、閉音節化すれば閉音節全体が高平である。

- (16) ヒャ]ク ニ[ヒャ]ク サン]ビャク ヨン]ヒャク ゴ[ヒャ]ク ロッ[ビャ]ク ナ[ナ]
ヒャク ハッ[ビャ]ク キュー]ヒャク

この、「〜十」と「〜百」における語末下降の有無の揺れは、この方言のアクセント型を考える上で、語末音節が長い場合や語末音節が狭い場合と、語末音節が短くて語末母音が広い場合との区別が必要なことを示している。

漢数詞「〜十」と「〜千」に助数詞「〜円」を伴う語形では、アクセントの上では「〜十円」及び「〜千円」と一桁数詞の複合語と解釈できる音形になる。「〜十」の型の区別は「〜十円」には反映されない⁵。

- (17) ジュー]]エン ニ[ジュー]]エン サン[ジュー]]エン ヨン[ジュー]]エン ゴ[ジュー]]
エン ロク[ジュー]]エン ナナ[ジュー]]エン ハチ[ジュー]]エン キュー[ジュー]]
エン

- (18) セン]]エン ニ[セン]]エン サン[ゼン]]エン ヨン[セン]]エン ゴ[セン]]エン ロク
[セン]]エン ナナ[セン]]エン ハッ[セン]]エン キュー[セン]]エン

⁵ 東京方言の複合語から類推すると、この種の後部決定型の後部要素エン「円」／マイ「枚」が無標形として前部要素に要求するのが「尾高形」である、という解釈も可能と思われる。

2.3. 名詞文節のアクセント形

名詞文節のアクセント形は、連文節データの読み上げの形とした。名詞と助詞の組み合わせは、2013年3月に実施した1回目の調査では、網羅的・体系的な項目設定をせず、連文節として自然な形であることを優先して調査項目を選定した。名詞は、単独形の調査項目に限定せず、音節数に応じて各類ごとに1音節と2音節の助詞が共に調査項目に含まれるようにした。なるべく多様な変異形を採集する、という点に関しては、意図したような結果を得ることができた。

2.3.1 1拍名詞

先行研究では助詞は低接とされる。1拍助詞の場合、低接と平進の両方の形が出る。

(19) a. カニ[クワレル〜カニ]クワ[レ]ル〜カニクワ[レ]ル 「蚊に食われる」

b. ヒ[ガツイ]]タ〜ヒガ[ツイ]]タ 「火がついた」

c. ハ[ノ]ウ[ラ〜ハ]ノウ[ラ] 「葉の裏」

(20) キノミジ[カイ]]ヒ[ト〜キ]ノミ[ジカイ]]ヒ[ト] 「気の短い人」

助詞ノは、平進例が他の助詞より多いが、これには(19)のような連文節の複合語化とも分析できそうな場合を多く含んでいる。(19)cのように、他の助詞のようにノが低接する場合もある。また、1拍名詞に2音節助詞カラ、マデが接続する文節例（「身から」「手から」「葉まで」「根まで」）は、Hが助詞側の第1音節に出る語形(ハ[マ]デ)が圧倒的で、助詞が低いのは12例中1例（ハ[マ]デ）のみである。

2.3.2 2拍以上の名詞：1拍助詞

下降（非尾高）・非下降（尾高）とも1音節助詞は低接するのが支配的であるが、1拍助詞の接続では、特に下降タイプの型での揺れが目立つ。一つは、Hのピークのずれである。これは特に、語末母音の広い名詞と3音節名詞で起きやすい。

(21) a. ア[メ]ノヒ〜ア[メ]ノヒ 「雨の日」 cf. ア[メ]

b. フ[ネ]デワタ]ル〜フ[ネ]デワ[タ]ル 「船で渡る」

c. マ[ド]オア[ケ]ル〜マ[ド]オア[ケ]ル 「窓を開ける」

(22) a. サ[ク]ラガ[サ]ク〜サ[ク]ラガ[サ]ク 「桜が咲く」

b. タ[ヌ]キニバカサ[レ]ル〜タ[ヌ]キニバカサ[レ]ル 「狸に化かされる」

もう一つは、(1)のタイプの下降契機の削除である。このような平板化は、非下降の型でも起きるが、非下降の型では文節末で上昇する場合に限るのに対し、下降型では文節末で上昇する（次の語頭が高い）場合と下降する（次の語頭が低い）場合の両方がある。

(23) a. ウ[ズ]ラノタマ[ゴ〜ウ[ズ]ラノ]タマ[ゴ] 「うずらの卵」

- b. タ[ヌキニ]バカサ[レ]ル 「狸に化かされる」 cf. (21)b
 c. コ[コ]ロノナカ～ココロノ[ナ]カ 「心の中」
 (24) a. トーフノ[カ]ド 「豆腐の角」
 b. ウ[ラ]ノハタケ～ウラノ[ハ]タケ 「裏の畑」
 c. アタマノ[カ]タチ～アタマノ[カタ]チ～アタ[マ]ノ[カタ]チ 「頭の形」

文節末で上昇するタイプは、複合語形成のタイプとして、前部要素がアクセント型に関わらず全低化して後部要素の冒頭が高くなるものとよく似ている。

2.3.2. 2 拍以上の名詞：2 拍助詞

下降と非下降の型の違いがもっともはっきりと出そうなのが、2 拍助詞カラとマデが接続する場合である。1 拍名詞にこれらの助詞が接続する場合にカ]ラ、マ]デが支配的であることは先に述べた。2 拍以上の名詞でこれらの形が接続する場合は、非下降型と考えられる場合が多い。この場合、名詞は全低となる。

- (25) ウマ[カ]ラ「馬から」 フロ[カ]ラ「風呂から」 イエ[カ]ラ「家から」 イエ[マ]デ「家まで」
 アタマ[マ]デ「頭まで」 ゴジュー[マ]デ「五十まで」 フクロ[カ]ラ「袋から」

ほとんどの場合、3 人のコンサルタントが一致しており、カ[ワマデ～カワ[マ]デ「皮まで」のような揺れはそもそも型が揺れている場合であると考えられるが、同じコンサルタントで揺れる場合として、次のようなものがある。

- (26) イエ[カ]ラ～イ[エ]カラ「家から」 イエ[マ]デ～イエマ[デ]「家まで」 フ[ロ]カラ～フロ[カ]ラ「風呂から」

これに対して、下降型の場合は、上記であげた変異形がすべてそろったさまざまな音形が現れる。

- (27) a. [マ]チマデ～マ[チ]マデ～マ[チマデ] 「町まで」
 b. [カオ]カラ～カ[オカラ] 「顔から」
 c. ハ[タ]ケカラ～ハ[タケカ]ラ～ハ[タ]ケ[カ]ラ 「畑から」
 d. コ[コ]ロカラ～コ[コロカラ]～コ[コロカ]ラ 「心から」

カ]ラやマ]デの現われる音形は、名詞側の下降がなくなる場合と、名詞側の下降があり助詞側でふたたび上昇する場合がある。後者は、下降型の名詞に1 拍助詞が接続する場合にも出現することのある(例:[メ]モ[ミ]ミ[モ]「目も耳も」)イントネーション形であると考ええる。2 拍助詞のカ]ラやマ]デが独自のアクセントをもつタイプであるとするれば、(25)は(23)のような複合語的な形とも似て見えるが、下降型の語が下降を失ってカ]ラに接続する場合は低平にはなっていないように思われる。

3 複合語と連文節—談話資料の分析

リスト調査の揺れの分析から判断すると、鰯浦方言の下降型と非下降型は、語頭周辺と語末周辺のいずれかでピッチ上昇をもつ二つの語声調と分析できる可能性が強い。下降型の語声調は、下降する実現形と下降しないで平板化する実現形をもつ。非下降型の文節が後続する場合、下降型の平板化実現形と非下降型語声調は、ともに文節境界付近で下降し、下降型の文節が後続する場合は上昇する、というような体系である。

下降型の上昇は、2 音節語では 1 音節目で完了しなければならないが、3 音節以上の語では 2 音節目で実現すればよい。続く下降コントウアを維持するためには、ピークは遅いほうがよい。語長が長くなると、平板化実現形との違いは維持しにくくなりそうである。しかし、談話資料を聞いている限り、4 音節を超えるような下降型の長い語はまだ見当たらない。

この、長い下降型の欠如は、鰯浦方言の語複合規則の結果である可能性がある。この方言の複合語生成には、前部要素と後部要素の境界を表示しないタイプと、境界が表示されるタイプがある。前者は、複合語全体としての音形は、非下降型、つまり、低平調が連続して末音節周辺で上昇する音形となる。後者は、前部要素が低平で、後部要素の冒頭音節で上昇する。つまり、非下降型+下降型の連続とも解釈できそうな語形になる。2 回目の調査で実施した複合語リストの読み上げでは、65 の語例のうち、境界非表示型が出たのは(28)の 4 例のみで、残りはすべて境界表示型であった。

(28) ナマワ[カ]メ「生若布」ノドボト[ケ]「喉仏」アソビツカ[レ]「遊び疲れ」バカジ[カ]
ラ〜バカ[ジ]カラ「馬鹿力」

(29) a. イモ[バ]タケ「芋畑」 ムギ[バ]タケ「麦畑」

b. マチ[ツ]クリ「町づくり」<ツク[リ] ムナ[サ]ワギ<サワ[ギ]

境界非表示型では、後部要素の上昇位置が保存される場合もあるが、談話資料の中には下降型の後部要素が非下降型で出ている例もある。表示型では、後部要素が下降型でも非下降型でも、後部要素の冒頭の音節が高い。どちらの型の複合語でも、前部要素は上昇契機を失って低平になる。

(30) a. ゲンロクソ[デ]「元禄袖」ナガソ[デ]「長袖」cf. ソ[デ]

b. ヤマイ[キヨ]]「山行きを」ハタケカヤ[シ]「畑(を)鋤きに」(NHK 資料 p172)

c. ヤドカ[リ]「宿借りに」ヤドモト[サ]ネ「宿元に」(NHK 資料 p163)

境界表示型の複合語の単独形は、後部要素が 1 音節卓立か、あるいは 2 音節目以降で下降するが、自発談話資料の中には複合語の後部要素が平板に発音される例も出る。これが

すべての複合語で可能であるとすれば、後部要素は下降型として実現していることになる。

(31) a. ツカイ[オー]]ケ「使いで」 クイ[オー]]ケ「食べで」

b. ツカイ[オーケ]ガ[ア]ル 「使いでがある」

(23)c と(24)で挙げたような、前部要素が上昇契機を失い、下降型では下降契機も現れない、型の対立が中和した連文節構造は、談話資料の中でもしばしば観察される。

(32) a. ミズオア[ビ]ル 「水を浴びる」

b. チアントデ[キ]ル～チャン]]トデキ]ル 「ちゃんとできる」

c. ツンノーテキ[マシ]タ]カラ 「連れ立って来ましたから」

このような構造の出現条件の解明については、さらに談話音声資料の分析が必要である。

対立が中和するような構造が多く、また、実現形の揺れが大きいなど、型の対立が維持しにくい特徴が多い一方で、ギョ[イ]エ「仲の良い家」やテ[ヤ]リ「手伝い」のような短い複合語を含め、語境界や文節境界を維持するような仕組みが観察されることを付け加えて、鰐浦アクセントの分析の現段階でのまとめとする。

参考文献

- 金田一春彦(1999)「対馬 附壱岐のアクセントの地位—九州諸方言のアクセントの対立はどうしてできたか」『日本列島方言叢書 25 九州方言考③』ゆまに書房. (103)-(117)
(初出 1954：九学会連合対馬共同調査委員会『対馬の自然と文化』古今書院)
- 早田輝洋(1982)「博多方言の名詞のアクセント体系」『九大言語学研究室報告』3. 1-18.
- 平山輝男(1999)「壱岐対馬両方言の音調に就いて」『日本列島方言叢書 25 九州方言考③』ゆまに書房. (87)-(102) (初出 1951：『音声の研究』7)
- 日本放送協会編(1999)『CD-ROM 版全国方言資料』第9巻 辺地・離島編Ⅲ九州，日本放送出版協会